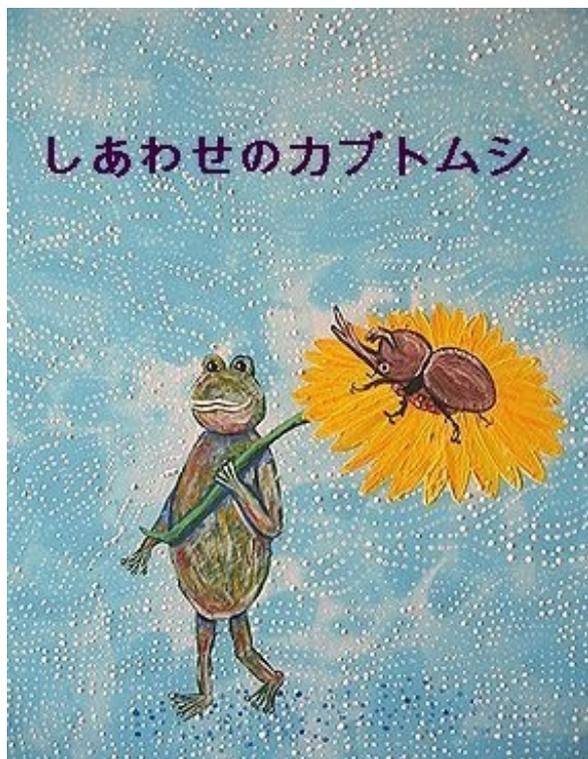


しあわせのカブトムシ





ピコは、木につかまっているカブトムシを見つけました。カブトムシは、幸せをよぶ虫とカエルの仲間ではいられています。ピコはとてもよろこびました。そして、いいことを思いつきました。

「このカブトムシをつかまえて、病気のおじさんのところにつれていこう。きっと病気がよくなるにちがいない」

しかし、カブトムシをつかまえるのは大変です。カブトムシの足はするどくて、カエルのひふをやぶってしまうのです。カブトムシをつかまえようとして、命をおとしてしまった仲間もいます。ピコはかんがえました。そして、思いつきました。

「ヘチマのつるをもってきて、あのツノにひっかけよう」

ピコはつるをもって、カブトムシに近づきました。そして、じっとしているカブトムシのツノにうまくしばりました。



ピコはカブトムシを木からひっぱっておろし、ゆっくりと歩きました。カブトムシは、のそのそとピコの後をついていきます。

ピコはカブトムシをつれていると、なんだか幸せになっていくような気がしました。ピコはとくいげに前にすすみました。



ピコが歩いていると、なにかをかぶり、虫取りあみをもったカエルに出会いました。カエルはその上から目をだしていました。ピコはふしぎに思っていました。

「なにかをかぶっているの？」

「ぼうしだよ。ぼくはひふが弱いんだ。こんなつよい陽ざしじゃやけどしてしまうよ。きみはだいじょうぶなの？」

「うん。ぼくはぜんぜんへいきだよ」

「ぼくのおばあさんが、むかしよく言ってたんだ。夏の陽ざしは体をとかしてしまうんだって。毎年夏の光をあびていると、10年後にはとけて、ドロにみたいになってしまうらしいよ。10年後、そうなりたくないから、今からぼうしをかぶっているんだ」

ピコはやっぱりふしぎに思って、ぼうしをじろじろと見ました。そして、10年後には自分とはとけてなくなってしまうかもしれない……としんけんに思いました。

「これから、力をたいじしにいくんだ。血をすう力は、あくまの虫だからね。おばあさんがそう言ってたんだ。じゃあね」

カエルはそういうと、いってしまいました。



しばらく歩いていると、木のえだに足をひっかけてさかさまになっているカエルがいました。カエルはさかさまになりながら、うでをくんでいます。なにやら考え事をしているようです。ピコはたちどまってききました。

「そんなところでなにをしているんだい？」

すると、カエルはさかさまのままこたえました。

「はじめは木のえだにこしかけていたんだ。だけど、うっかりすべって、こんなになってしまったんだよ。今、どうやっておりようか考えているところ」

「はしごをもってきてあげるよ」

「いや、いいよ。どうせ、いつつかかれておっこっちゃうんだから」

カエルはそう言って、うでぐみをしたままです。

「あ、カブトムシつれてるんだね。いいことありそうだ」

カエルはさかさまのまま、にっこりとわらいました。



だんだんあたりは暗くなってきました。

ピコとカブトムシは、林の中をまっすぐ歩きました。上を見あげると、木々の間から星が見えます。星は、まるで宝石のようにかがやいています。

「なんてきれいなんだろう。宝物を見つけたような気がするよ」

ピコはため息をつきました。

あたりはとてもしずかで、なにも音がきこえません。ピコは、ほんのすこしだけねむくなってきました。



小さな池のほとりにでました。あたりはしんとしていました。ピコが池のまんなかあたりを見ると、黄色いような白いような光がかがやいているのを見つけました。ピコがそれをじっと見ていると、池から声がきこえてきました。

「おおい、流れ星をつかまえたんだ。すごいだらう？」

「毎年、ここで流れ星をつかまえるのをねらってたんだ。今年、やっとつかまえられたよ」

「その星をどうするんだい？」

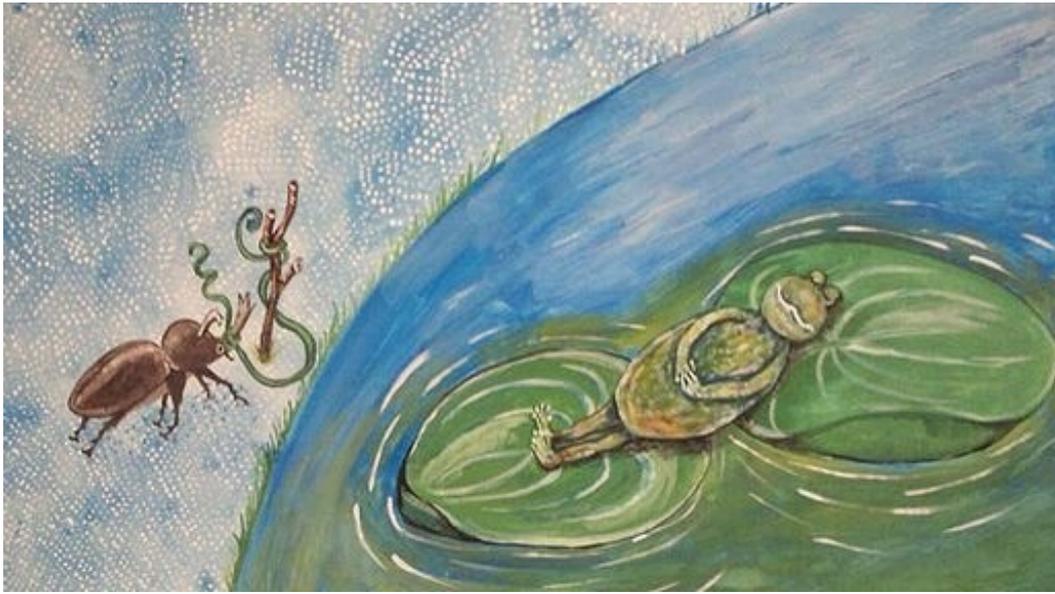
星の光が、だんだんピコに近づいてきました。

「星をください、でんとうにするよ。あちこちにおくんだ。夜の森もこれでこわくないよ」

星をもったカエルの顔がようやく見えました。

「これで、夜道もあぶなくないね」

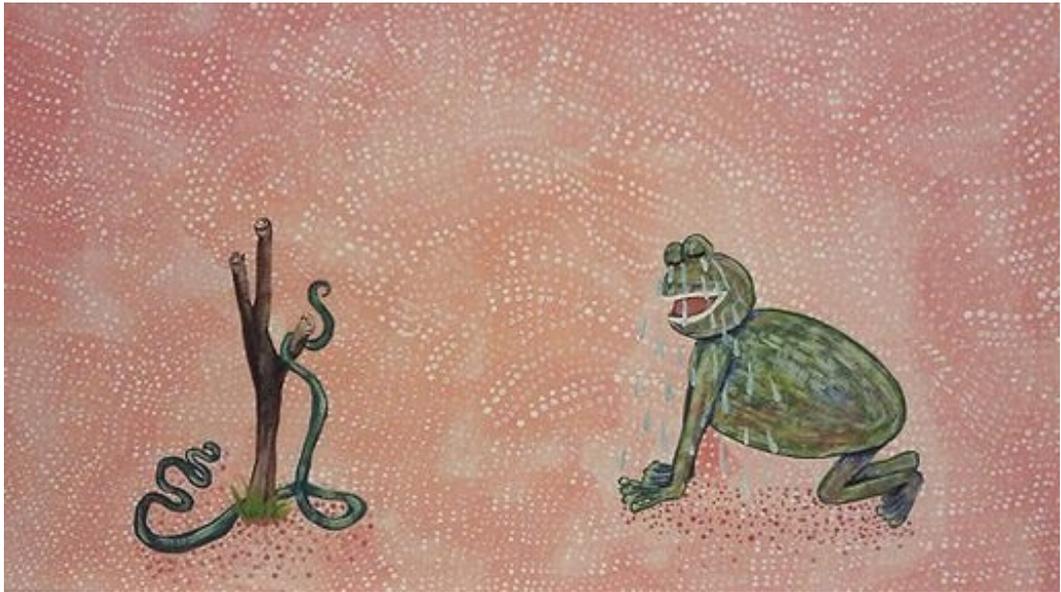
ピコはいいました。



ピコは、池のほとりの木のくいにカブトムシをつなぎました。一日歩きつづけたせいか、くたくたでとてもねむくなってしまいました。ピコは池にはいり、ういているスイレンの葉の上に頭と足をのせ、横になりました。空にかがやいている小さな星を見ているうちに、すぐにねむりにおちていきました。

池の水面はしずまりかえり、星だけがまたたいています。夜はすっかりふけていきました。

その夜、ピコはカブトムシを見て元気になったおじさんの夢をみました。おじさんのえがおが頭にうかできます。元気になったおじさんのすがたがうかぶたびに、うれしくてしかたがありませんでした。



朝の光にピコは気づきました。体のつかれもすっかりとれ、早くおじさんのところにいこうと思いました。しかし、カブトムシのすがたは見あたりません。ヘチマのつるがあるだけです。ピコはびっくりして、あたりを見まわしましたが、カブトムシを見つけることができません。

「なんてこったい！ どこへ行ってしまったんだ！」

ピコは大声でさげびました。

そして、かなしくなってボロボロとなみだをこぼしました。いくらなくても、カブトムシのすがたはありません。



幸せだった心は、一気につきおとされてしまったようでした。幸せをよぶカブトムシは、とつぜん心を不幸にしてしまう虫でもあったのです。

ピコはすわりこみました。カブトムシをつかまえなければよかったと思いました。これでおじさんの病気はよくなるのだ。ピコの大きなきたいはこわれ、むねのあたりがキュッといたくなりました。ピコはとほうにくれました。しかし、ここでじっとしているわけにもいきません。しかたなく、歩きはじめました。



ピコは、道ばたにさいているアサガオを見つけました。ピンクやむらさき色をしたアサガオの花は大きく開き、こちらを見てわらっているように見えました。

そうだ、このアサガオをつんで、おじさんのところにもっていこう。カブトムシの代わりに、このきれいなアサガオをプレゼントしよう。おじさんは、きっとよろこんでくれるにちがいない。

ピコは気を取りなおして、アサガオの花をつみ、かたにかつぎました。そして、早足でおじさんの家に向かいました。



ようやく、おじさんの家につきました。

「おじさん、ちょうしはどう？」

すると、おじさんはベッドからおき上がり、いいました。

「ピコくん、いいところにきてくれた！ 見ておくれ、カブトムシだよ！ カブトムシがわしのところにとんできてくれたんだよ！ わしは幸せ者だ！ なんて幸せなんだろう！」

ピコはびっくりしました。あのカブトムシが先回りをして、おじさんのところに来ていたなんて。

「これで病気もよくなるような気がするよ。いや、ぜったいによくなる！」

「そうだね、なんていったって、カブトムシは幸せをよぶ虫だから！」

ピコには、おじさんのえがおがまぶしくうつりました。そしてまた、みたされた気持ちになりました。

気がつくやうに、かたにかついでいたアサガオはしおれていました。

もうお昼になっていたのです。

おわり